Matthew Arnold 考（I）

鈴木　昭一

はじめに

Matthew Arnold (1822-88) を考えることは詩を考えることである。それは文学を考えることであり，社会や時代を考えることでもある。更に言えば，人生いかに生きるべきかを考えることでもある。私にとって，Arnold はそういう存在である。「読書と観察と思索とによって[1]」("by means of reading, observing, and thinking") culture に到達しようとした Arnold から学ぶところは多い。しかし，自からを「悪名高き，非大系的な，一介の文章家[2]」("a notriously unsystematic and unpretending writer") とか，「推論と立論における定評ある未熟さの持ち主[3]」("my confessed inexpertness in reasoning and arguing") と認めているとおり，Arnold の言っていることは必ずしも明快ではない。Arnold の非大系性に引きずり込まれないように警戒しながら，今回はculture の必要性を主張するに至る過程を整理しておきたい。

I.　Arnold の二重性

若い頃の Arnold はフランスにかぶれて，ダンディズムで身をかためていた。Oxford 大学でのダンディぶりは有名だったようで，外見は陽気，嘲笑的態度で通していたらしい[4]。その反対に，内面的にはメランコリーであった。それは，喜劇よりも悲劇を重んじたところにもうかがえるし，彼の詩の多くにメランコリーな調子が充満しているところを見てもわかる。そのたどりついたところは，ストイッな「自己沈潜の世界[6]」("Sink in thyself."——'Empedocles on Etna' l. 146) であった。

詩人的気質の上では，Byron 的要素が最も強かったと言われている。Wordsworth の死を悼んで書いた 'Memorial Verse' (1850) の中で Wordsworth の「治癒力」("healing power") を讃えつつも，Byron の「情熱」("passion") にも深い共感を示している。

When Byron's eyes were shut in death,
We bow'd our head and held our breath.
He taught us little; but our soul
Had *felt* him like the thunder's roll.
With shivering heart the strife we saw
Of passion with eternal law;
And yet with reverential awe
We watched the fount of fiery life
Which served for that Titanic strife.
('Memorial Verses' ll. 6-14)

とはいえ，Goethe の「知の力」("Goethe's sage mind") をも讃えずにはおれない。父 Thomas Arnold が校長を務める Rugby School に学んだ Arnold は，そこでみっちり古典教育を受けた。情におぼれたいという衝動を持ちながらも，知的側面をも無視できないという教育を受けてきた。

高橋康也氏は「(アーノルドの) ダンディズムとはなくてもよかった空しい仮面ではなく，彼が詩に達するための必要な手段であった。知的・倫理的な深刻癖とロマン派的耽溺との間でバランスを保つための戦略であった[5]」と言う。

外面のダンディズムと内面のメランコリー，ロマン派的心情と知的欲求という二重性は，女性に対する態度にも現れた。Arnold は「スイス詩集」('Switzerland') で歌われている Marguerite という女性と恋に落ちた。

Again I see my bliss at hand,
The town, the lake are here;
My Marguerite smiles upon the strand,
Unalter'd with the year.

I know that graceful figure fair,
That cheek of languid hue;
I know that soft, enkerchief'd hair,
And those sweet eyes of blue.
('Meeting' ll. 1-8)

J. D. Jump は，Marguerite に言及した他の詩も含めて，彼女の姿を次のように描写している。

She had blue eyes; soft ash-coloured hair; a pale complexion; rounded cheeks; and a mouth which readily assumed an arch and mocking smile. She often wore a kerchief tied around her head. She moved with a 'pliant grace' and spoke in a clear, buoyant, and musical voice. She was French[6].

Arnold 自身は "Marguerite was imaginary." と語っていたそうだが，近年 Park Honan[7] の研究で，Marguerite は Mary Claude というベルリン生まれのフランス系女性であることが明らかになった。その Marguerite こと Mary Claude への思いをこめて，「スイス詩集」には7つの詩が集められているが，そこで歌われているのは，情熱的な恋というよりも，Marguerite をとるべきか，知的世界を取るべきかという選択に迷っている Arnold の姿である。先に引用した 'Meeting' につづけて，Arnold はこう歌わずにはおれない。

Again I spring to make my choice;
Again in tones of ire
I hear a God's tremendous voice:
'Be counsell'd, and retire.'
('Meeting' ll. 9-12)

Arnold としては，感情の起伏が烈しく，彼をもてあそぶかのような Marguerite (Mary Claude) に全人生を託す気にはなれなかったのかもしれない。別な詩では「もう女性はいらない」とまで言い切っている。

I too have felt the load I bore
In a too strong emotion's sway;
I too have wished, no woman more,
This starting, feverish heart away.
('A Farewell' ll. 29-32)

結局，Marguerite (Mary Claude) には1849年を最後に別れを告げることになる。

今 Arnold のほしいのは安らぎである。1850年には次のように歌う。

My pent-up tears oppress my brain,
My heart is swollen with love unsaid.
Ah, let me weep, and tell my pain,
And on thy shoulder rest my head!
('The River' ll. 33-36)

こう歌う Arnold はもはや以前の彼ではない。彼

の求めているのは家庭的な愛と安らぎである。1847年には政治家Lansdowne侯爵の秘書となっていたが，その収入では結婚生活を営む訳にはいかない。そこで選んだのが「視学官」(School Inspector) の仕事である。1851年に就任してから死ぬ2年前の1886年まで，35年間この職を務めることになる。「視学官」という生活上の保障を得て，彼がFrances Lucy Wightmanと結婚をしたのは1851年6月10日のことである。

ダンディズムとメランコリー，Byronに共感する心情と父Thomasの影響下に育った知的欲求，Mary Claudeへの激しい恋と安らぎを求めるFrances Lucy Wightmanへの思い，そういうさまざまな二重性を内に秘めて，Arnoldは生きてきた。その意味で1851年という年はArnoldにとって大きな転回点となった年である。その1851年に書かれたのがArnoldの代表詩 'Dover Beach' である。新妻への愛に社会や時代への思いを重ね，抒情性に批評精神を重ねて，みごとに結晶させた作品を次に眺めておこう。

II. 'Dover Beach'

The sea is calm to-night.
The tide is full, the moon lies fair
Upon the straits;on the French coast the light
Gleams and is gone; the cliffs of England stand,
Glimmering and vast, out in the tranquil bay.
Come to the window, sweet is the night-air! (ll. 1-6)

「静かな海」，「潮は満潮」，「夜空に月」，「遠くにフランスの光」そして「さわやかな夜風」とくれば，これ程もの静かで，満ち足りた情景描写は他にあるまい。その上，音声面でいえば，"sea", "calm", "moon", "gleams", "sweet" と長母音が重なって，この詩の抒情性を一段ときわだたせている。1851年6月10日に結婚したArnoldは，その月の下旬に新妻Frances Lucyを伴ってDoverを訪れた。"Come to the window, sweet is the night-air!" という妻への呼びかけは，誰の耳にも率直に響く。しかし，かたわらの妻に聴いてほしいのは，波打ち際の波の音でもなければ，小石のきしむ音でもない。海の奥深いところから送られてくる「永遠の悲しみの調べ」("the eternal note of sadness") を聴きとどけてほしい，とArnoldは願う。

Only, from the long line of spray
Where the sea meets the moon-blanched land,
Listen! you hear the grating roar
Of pebbles which the waves draw back, and fling,
At their return, up the high strand,
Begin, and cease, and then again begin,
With tremulous cadance slow, and bring
The eternal note of sadness in. (ll. 7-14)

波は押し寄せ，そして引いてゆく。小石のきしむ音も「始まってはやみ，また始まって」("Begin, and cease, and then again begin") 果てしがない。一見単純な言葉を並べたにすぎないこの一行は，波の動きと共にきしむ小石の往復運動を語って，実にみごとである。そして，穏やかな海のリズムは「震えるゆるやかな旋律」("tremulous cadance slow") という表現の中に収斂してゆく。

しかし，その旋律は「悲しみ」を底に沈めている。第1連の末尾("the eternal note of sadness") はずしりと重たい。ここまで読んでくると，"The sea is calm to-night." で始まった視覚的情景が，"Only" や "Listen!" というかけ声で聴覚の世界に変わり，いつの間にか，作者の「心の海」へと引きずりこまれていることに気づく。Arnold

が聴いている「小石のきしみ」（"the grating roar of pebbles"）は単なる自然描写ではなくて，人の心のきしみ，人と人，人と社会とのきしみとも読めなくはない。

この「永遠の悲しみの調べ」はArnoldと妻だけが聴いているのではない。Sophoclesがかつてエーゲ海で耳にした調べもこれと同じであった。

Sophocles long ago
Heard it on the Ægæan, and it brought
Into his mind the turbid ebb and flow
Of human misery; we
Find also in the sound a thought,
Hearing it by this distant northern sea.
(ll. 15-20)

Sophoclesを引用したところを見ると，運命の命ずるままに生きなければならなかったOedipusの悲劇がArnoldの脳裏をかすめたのだろうか。「人間の悲惨さについての淀んだ潮の干満」（"the turbid ebb and flow / Of human misery"）という表現には，Oedipusの苦悩と彼ゆえに腐ってゆくThebesの国のイメジを重ねることができる。

自分と同じ思いをSophoclesの中にも見たArnoldは，第3連では二つの満潮を比較する。

The sea of Faith
Was once, too, at the full, and round earth's shore
Lay like the folds of a bright girdle furled.
But now I only hear
Its melancholy, long, withdrawing roar,
Retreating, to the breath
Of the night-wind, down the vast edges drear
And naked shingles of the world.
(ll. 21-28)

「今宵の海」は満潮である。それと同様に，かつては「信仰の海」も地球上の海岸を満々と満たしていた。しかし，今やその「信仰の海」は，眼前の満潮とは逆に，果てしない引き潮である。「憂愁を帯びた，長い，引き潮のうなり」（"its melancholy, long, withdrawing roar"）が「引いてゆく」（"retreating"）。先に，私は「小石のきしみ」から「人と人との心のきしみ」を読みとったが，ここの"roar"は，「信仰の海」を取り上げているだけに，「魂のうめき」のような響きをもって迫ってくる。しかも，"melancholy"，"long"と形容詞を重ね，"withdrawing"，"retreating"と同義反復している表現に，私はArnoldの底知れぬ絶望を見る。

今宵の海は穏やかで，満潮だが，魂の海は引き潮，そして時代に頼れるものは何一つない。だからせめて新妻よ，二人の間だけは誠実であろう，とArnoldは願う。

Ah, love, let us de true
To one another! for the world, which seems
To lie before us like a land of dreams,
So various, so beautiful, so new,
Hath really neither joy, nor love, nor light,
Nor certitude, nor peace, nor help for pain;
And we are here as on a darkling plain
Swept with confused alarms of struggle and flight,
Where ignorant armies clash by night.
(ll. 29-37)

この第4連9行には色々問題がある。一つは'Dover Beach'の製作年月日にかかわることであ

る。Arnoldが Frances Lucy Wightman と結婚したのは1851年6月10日である。Kenneth Allotは，Arnoldの金銭支出の記録から，6月23〜25日にDoverへ出かけた，と推測している[8]。E. K. Chambersは，当時の気象記録から6月13日が満月だったことを紹介し，6月の中・下旬に書かれただろう，と推測している[9]。両者の見解を重ねてみると，'Dover Beach'は1851年6月下旬の作と見るのがほぼ正しいと思われる[10]。

しかし，37行の全部がDoverで書かれた訳ではない。第1連(ll. 1—14)，第2連(ll. 15—20)はEmpedoclesについてのメモの裏に書かれており，第3連(ll. 21-28)以下はその紙の別な所に"…of the world. Ah love &c."と鉛筆書きされている点に注目して，Paul F. Baumは，第3連(ll. 21-28)は最初の20行と最後の9行とのつなぎとして書かれた[11]，と指摘する。Tinker & Lowryは，第4連が先に書かれていて，第1〜3連はその前置きである[12]，と言う。Kenneth Allotは二つの可能性を示す[13]。その一つは，第4連はすでに書いてあって，その後，第1〜3連をDoverで書いたとするもので，もう一つは第4連をDoverで書き，Londonに帰った直後に第1〜3連をつけ加えたとするものである。後者の考え方は詩の内容からして無理があると思われるが，いずれにしろ，"Ah, love, let us be true"で始まる第4連が先にあって，その最終連を有効に生かすための前置き，あるいは場面設定として第1〜3連が置かれたことは明らかである。製作過程についてはこれくらいにして，次に移ろう。

"neither…nor…"でないないずくしを語るのは，Wordsworthの'Tintern Abbey'や'Immortality Ode'にも見られるし，Victoria朝の詩に多い特徴となれば，あまり問題とするに価しない。むしろ，Arnoldの主眼は，イギリスを「敵・味方の区別もつかない夜陰の戦場」ととらえている結びの3行にある，と考えたい。これはThucydidesの *History of Peloponnesian War* vii ch. 44に由来するという。Arnoldの友人Cloughの詩にもこの戦いについての言及があり，Arnoldに大きな影響を与えたNewmanの説教の中にも登場しているという[14]。となると，「夜闘」(night battle)のイメジはArnoldの中でかなりなじみのものだったと考えていいだろう。

この3行については評価の分かれるところらしく，Paul F, Baumはこれを構成上の失敗だとして次のように言う。

> In the last three lines he brought in a new image, apparently to intensify the dark picture of human misery but confusing and inappropriate because, as everyone feels, it shifts our interest and attention from the sea imagery, which has been dominant hitherto, to one of "a darkling plain, Where ignorant armies clash by night." This is the one structural blemish of the poem[15].

しかし，次のように解釈することは不可能だろうか。眼前の満潮とは逆に，「信仰の海」は引き潮である。引きに引いてゆく潮は「荒涼とした岸辺」("vast edges drear")と「一面の砂利」("naked singles of the world")を残して去ってゆく。引き潮のあとにもう海の水はない。あるのは荒涼とした砂利の広がりだけだ。だから，満潮で始まった海のイメジは，28行までで完結している，と考えてみたらどうだろう。「信仰」を失った平原が「薄暗がりの戦場」("a darkling plain")と化すのにそれ程遠くはないと思われるが，ちょっと無理があろうか。あるいは，海のイメジから陸のイメジに転換したことは認めるとしても，もう一つ夜のイメジは，はっきりと残っている。月光の下での兵士のぶつかり合いに，"neither joy, nor love, nor light, / Nor certitude, nor peace, nor help for pain"と否定語を積み重ねてみる

と，第4連はまさにArnoldの絶叫といえよう。

静寂から慟哭へ，平穏から夜闘へ，海のイメジから陸のイメジへと激変させることで，むしろ，場面設定としての情景描写や想像上の引き潮が効果を発揮しているのではないか。一見破綻しているかに見える最後の3行にArnoldの本領がある，と私は考えたい。1851年といえば，時あたかも世界最初の万国博覧会がイギリスで開かれた年である。産業革命の名の下に拡張と発展に向かうイギリスにあって，その精神性の欠如を嘆かずにおれないArnoldの心境が，この'Dover Beach'にはよく反映されていると思う。この詩にはArnoldの時代批判が濃厚である。そこで次に，批評家Arnoldについて考えておきたい。

III. Criticism

'The Function of Criticism at the Present Time'について語るArnoldの頭の中には三つの大前提がある。その一つは，批評活動は創作より下位に位置づけられることは確かだが，批評でもそれなりの喜びを味わいうるとする立場である。

> The critical power is of lower rank than the creative…. But it is undeniable, also, that men may have the sense of exercising this free creative activity in other ways than in producing great works of literature or art; if it were not so, all but a very few men would be shut out from the true happiness of all men. They may have it in well-doing, they may have it in learning, they may have it even in criticising[16].

二つ目としては「文学の天才の仕事は総合と提示であって，分析や発見ではない」とする考えである。

> The grand work of literary genius is a work of synthesis and exposition, not of analysis and discovery; its gift lies in the faculty of being happily inspired by a certain intellectual and spiritual atmosphere, by a certain order of ideas, when it finds itself in them; of dealing divinely with these ideas, presenting them in the most effective and attractilve combinations, —making beautifu works with them, in short.[17]

もう一つは「秀れた文学作品を生み出すためには，人の力と時代の力とが同時に働く必要がある」とする考えである。

> For the creation of a master-work of literature two powers must concur, the power of the man and the power of the moment, and the man is not enough without the moment; the creative power has, for its happy exercise, appointed elements, and those elements are not in its own control.[18]

さて，こういう大前提をふまえて'The Function of Criticism at the Present Time'を考えてみるに，二つの視点で整理することができる。一つは"the Function of Criticism"についてのArnoldのとらえ方で，もう一つは"at the Present Time"に関する視点である。

"At the Psesent Time"あるいは作家と時代との関係についてはこう述べている。Arnoldの眼から見れば，「人の力」と「時代の力」とが共に存在した時代はSophoclesが活躍した古代ギリシアとShakespeareのエリザベス朝である。両人とも書物に没頭した人ではないが，みずみずしい思想が社会に充満していた，と言う。

二つ目に，「人の力」はあったが，「時代の力」

のなかった時として，19世紀初めの四半世紀，いわゆるロマン派の時代を挙げる。とりわけ，Byron, Shelley そして Wordsworh の名を挙げて，エネルギーにも創作力にもあふれていたが，知的欲求の点で欠けるものがあった，と言う。エリザベス朝にあった生活と思想上の民族的盛り上がりに欠け，あるいは Goethe に代表される教養や学問が欠如していた時代である。

そして三つ目に，Arnold の生きている19世紀後半は，「人の力」も「時代の力」もない時だと規定する。「人の力」についていえば，詩人としてスタートしたはずのArnold 自身，途中から詩人たることを放棄し，あるいは放棄せざるをえなかったし，ヴィクトリア朝を代表する Tennyson にしても，Browning にしても，英文学史上，時代を超える評価を与えられる程の人物ではない。「時代の力」については，イギリスの拡張期で，ヨーロッパ各国から思想を流入することが可能であるにもかかわらず，イギリス人は「政治的動物[19]」("political animal") で，実践に重きを置く[20] ("Practice is everything, a free play of the mind is nothing.") が故に，物事を党利党略的利害で処理してしまう時代である。Arnold の眼から見れば，ヴィクトリア朝とは拡散的，外面的で，無思想の時代だったのである。こういう時代の中で，みずみずしい思想を社会に充満させるために今必要なもの，それはcriticism をおいて他にはない，とArnold は強調する。

さて次に，第二の視点 "the Function of Criticism" について考えてみよう。criticism の役割について Arnold の言っていることを，私としては次の三つに整理しておきたい。まず第一は批評の基本，第二は批評の基準，そして第三は批評の目的の三つである。

1）批評の基本

Arnold が 'The Function of Criticism at the Present Time' を書いた動機は 'On Translating Homer' (1861) に対する反論に端を発している。Homer の翻訳論の中に書いた文を自から引用して，Criticism とは「対象を本質においてあるがままに見る努力」と言っている。"To see the object as in itself it really is" という言葉は Pater が *Renaissance* の序文に引用する程有名になった言葉[21]であり，批評家 Arnold の基本中の基本と考えていい。

> I said: "Of the literature of France and Germany, as of the intellect of Europe in general, the main effort, for now many years, has been *a critical effort*; the endeavour, in all branches of knowledge, theology, philsophy, history, art, science, *to see the object as in itself it really is.*" I added, that owing to the operation in English literature of certain causes, "almost the last thing for which one would come to English literature is just that very thing which now Europe most desires, —*criticism.*"[22] (italics mine)

また，別な個所では「脱利害」("disinterestedness") を説き，実利からは超然とすること ("keeping aloof") を強調する。

> The rule may be summed up in one word, —*disinterestedness.* And how is criticism to show disinterestedness? By keeping aloof from what is called "the practical view of things;" by resolutely following the law of its own nature, which is to be a free play of the mind on all subjects which it touches. By steadily refusing to lend itself to any of those ulterior, political, practical considerations about ideas[23].

"Disinterestedness" や "aloofness" に通じる言葉は，すでに1853年の詩集につけた Preface[24]の中で，Empedocles の古代ギリシアと現代とを比較して "disinterested objectivity" の必要性を強調しているところに，その萌芽が見られる。

「利害にとらわれず，対象を客観的に把握すること」――これが Arnold の言う「批評の基本」である。「あるがままに見ること」が，結果的には不可能であることは，誰の目にも明らかである。しかし，だからといって，物事を好き勝手に解釈していい，という訳にはゆくまい。とすれば，取るべき態度は一つしかない。いかなる場合でも，対象を自分からつき離し，可能な限り客観的にとらえようと努力するしかない。たとえ利害にかかわることであっても，ひとまずそういう態度で接することである。Arnold のいう「批評の基本」をそんなふうに理解してみると，これは何も文学批評だけに限ったことではないことに気づく。私たちの人生に起こりうるあらゆる物事にして，まず基本とすべきは「対象を本質においてあるがままに見ること」だ，と理解していいのではないだろうか。

2）批評の基準

次に，客観的な批評をするために必要な基準・ものさしについての Arnold の見解を見よう。これもまた有名な言葉で，「この世で知られ，考えられている最善のものを知ること」("to know the best that is known and thought in the world") そして「その最善のもの」に照して判断することを訴える。

> It obeys an instinct prompting it to try *to know the best that is known and thought in the world*, irrespectively of practice, politics, and everything of the kind; and *to value knowledge and thought as they approach this best*, without the intrusion of any other considerations whatever.[25]
> (italics mine)

「この世の最善のもの」は確かに大事である。しかし，具体的に何を指しているのか，ここでは語ってくれない。'The Study of Poetry' (1880) を参照すれば，いわゆる「試金石」("touchstone") として Homer, Dante, Shakespeare, Milton[26] を引用している。また 'Wordsworth' (1879) の中では英文学史上，Shakespeare, Milton につぐ作家として Wordsworth を位置づけている。しかし，ヨーロッパ文学の中での位置づけとなると，Wordsworth の上には，Dante, Shakespeare, Molière, Milton, Goethe[27]がくる。以上の作家に Sophocles もつけ加えるとすれば，Homer, Sophocles, Dante, Shakespeare, Molière, Milton, Goethe, Wordsworth といった作家たちが，Arnold のいう「この世の最善のもの」に該当すると考えていいだろう。これらの作家を「批評の基準」とし，あるいはその作家たちの詩句を「試金石」にして他の作品の良し悪しを吟味してゆけばよいことになる。Arnold は「試金石」の有効性について次のように言っている。

> Indeed there can be no more useful help for discovering what poetry belongs to the class of the truly excellent, and can therefore do us most good, than to have always in one's mind lines and expressions of the greatmasters, and to apply them as a touchstone to other poetry.[28]

そして，「試金石」中の「試金石」，ダイヤモンド中のダイヤは，短かいながらも完全な Dante の次の一行だ，と言って2回引用している。

> "In la sua volontade è nostra pace."[29]
> (="In His will is our peace.")

—*Paradiso*, iii. 85

3）批評の目的

さて最後に，何のための批評かについて触れておこう。答えは簡単で，最善の思想を広めることによって大きな思想の潮流を世の中に巻き起こし，そうすることによって創作上の画期的な大時代を到来させたい，とArnoldは願う。

It tends, at last, to make an intellectual situation of which the creative power can profitably avail itself. It tends to establish an order of ideas, if not absolutely true, yet true by comparison with that which it displaces; to make the best ideas prevail. Presently these new ideas reach society, the touch of truth is the touch of life, and there is a stir and growth everywhere; out of this stir and growth come the ereative epochs of literature.[30]

以上"the Function of Criticism"という言葉に依存して，Arnoldの言うcriticismとはいかなるものかを眺めてきた。青木雄造氏は，「このエッセイの画期的意義は『批評精神』の意義を明らかにした点にある。すなわち従来，批評といえばもっぱら作品のあとを追いかけて，その価値評価をおこなうものとされていたが，むしろ文学的創造に先立って存在し，創作の基盤となる精神的雰囲気と思想的体系とを作り出す『批評精神』の重要性をアーノルドは主張した[31]」と評価している。

「創作の前にまず批評精神を」と訴えるArnoldには，彼の生きている時代が島国根性丸出しで，党利党略と実践万能主義の時代と映っていることはすでに見てきた。だから，とArnoldは最後に言っている。「私の主張するcriticismはイギリスだけを射程に入れたものではなく，ヨーロッパ全体が知的・精神的な目的を一つにする共同体なのだ」と。

The criticism I am really concerned with, —the criticism which alone can much help for the future, the criticism which, through Europe, is at the present day meant, when so much stress is laid on the importance of criticism and the critical spirit, —is a criticism which regards Europe as being, for intellectual and spiritual purposes, one great confederation, bound to a joint action and working to a common result.[32]

IV. Culture

'Dover Beach' (1851)を書き，'The Function of Criticism at the Present Time' (1864)を書いたArnoldには「今の時代はこのままでいいのか」という危機意識が強かった。そのArnoldが，自分の関心を単に文学の範囲に留めておくことは，不可能であった。文学上のcriticismがやがて社会的なcultureの志向という形をとって登場してくるのは必然的な流れであった。Arnold自身criticismを定義して次のように要約している。

the idea of a disinterested endeavour to learn and propagate *the best that is known and thought in the world*, and thus to establish *a current of fresh and true ideas.*[33]
(itaics mine)

ここで注目しておきたいのは「知ること」("to learn") だけでなく，「広めること」("to propagate") にも力点が置かれているという点である。「知ること」はある意味では当然の作業であり，Arnoldにとっては，むしろ「広めること」の方に力点があった，と考える方が正しいかもしれな

い。このことを念頭において，culture についての定義と比較してみよう。

> The whole scope of the essay is to recommend culture as the great help out of our present difficulties; culture being a pursuit of our total perfetion by means of getting to know, on all the matters which most concern us, *the best which has been thought and said in the world*; and through this knowledge, turning *a stream of fresh and free thought* upon our stock notions and habits, which we now follow staunchly but mechanically, vainly imagining that there is a virtue in following them staunchly which makes up for the mischief of following them mechanically. This, and this alone, is the scope of the following essay.[34] (italics mine)

これを見れば，criticism でいう "the best that is kwown and thought in the world" が culture では "the best which has been thought and and said in the world" という表現に変えられ，"a current of fresh and true ideas"が"a stream of fresh and free thought" に置き換えられているにすぎないということがわかる。当然のことながら，culture においても「知ること」と「広めること」の双方を力説していることに変わりはない。こう見てくると，Arnold のいう culture とは文学における criticism の概念を，社会一般に拡大した概念であることは明らかである。

culture という言葉は本来「土地を耕やす」という意味であったが，Wordsworth が *The Prelude* (1805) の中で「文明の知的な一面」という意味で使って以来，その Wordsworth 的用法が除々に流布していった[35]。そこをとらえて，Arnold は culture の社会的側面を強調した，と言えそうである。culture には「個人的教養」だけでなく「社会的文化」という側面もあることを次のように述べている。

> Culture is then properly described not as having its origin in curiosity, but as having its origin in the love of perfetion; it is *a study of perfection*. It moves by the force, not merely or primarily of the scientific passion for pure knowldge, but also of the moral and social passion for doing good. As, in the first view of it, we took for its worty motto Montesquieu's words; "To render an intelligent being yet more intelligent!" so, in the second view of it, there is no better motto which it can have than these words of Bishop Wilson: "To make reason and the will of God prevail!"[36]

こういう眼でイギリスの現状を見るとき，Arnold には我慢のならないことばかりである。まわりのどこを見渡しても，「機械信仰」に落ち入っている。勝手放題に振る舞う自由も機械に他ならず，ましてや人口も，石炭も，鉄道も，富も機械にすぎない。宗教団体でさえその域を脱してはいない，と言い切る。つまり，そのものの即物的価値だけに満足し，それを超えた意味など考えようともしないイギリスの現状に，Arnold は我慢がならないのだ。

> Faith in machinery is, I said, our besetting danger; often in machinery most absurdly disproportoned to the end which this machinery, if it is to do any good at all, is to serve; but always in machinery, as if it had a value in and for itself. What

is freedom but machinery? what is population but machinery? what is coal but machinery? what are railroads but machinery? what is wealth but machinery? what is wealth but machinery? what are, even, religious organisations but machinery? Now almost every voice in England is accustomed to speak of these things *as if they were precious ends in themselves*, and therefore had some of the characters of perfection indisputably joined to them.[37] (italics mine)

こういう「機械信仰」は Gladstone がパリでの演説で "How necessary is the present great movement towards wealth and industrialism, in order to lay broad foundations of material well-being, for the society of the future.[38]" と説くときの物質主義にも共通しているし，Brightが "See what you have done![39]" と語って，都市・鉄道・工場の建設をイギリスの偉大さと讃える精神とも共通している。

盲目的な「機械信仰」を，なんとか克服しなければならない。機械を超えて，機械のかなたを見ることのできる力を養わなければならない。そのために Arnold は culture を説き，それを広めようとする。

おわりに

今回取り上げた 'The Function of Criticism at the Present Time' (1864年11月に *National Reiriw* に寄せたもの) に先立つこと3ヶ月前に，Arnold は 'The Literary Influence of Academies' を書いて *Cornhill Magazine* に寄せている。その中にも culture という言葉は使われているが，まだまだ個人的教養を意味する culture に留まっている。

Every one amongst us with any turn for literature will do well to remember to what shortcomings and excesses, which such an academy tends to correct, we are liable; and the more liable, of course, for not having it. He will do well constantly to try himself in respect of these, steadily to widen his culture, severely to check in himself the provincial spirit.[40]

'The Function of Criticism at the Present Time' で criticism の役割を明確に位置づけたあと，文学批評の三原則を社会批判に適用して，*Culture and Anarchy* の論を展開したことは，すでに見てきたとおりである。その中味を論ずるのは次にゆずることとして，今回は 'Dover Beach' に始まった Arnold の時代精神が，criticism の概念を基本として，culture にまで高められていった過程を整理したところで一区切りとしておく。

注

1) Matthew Arnold: *Culture and Anarchy* (Kenkyusha, 8th pr. 1961) p. 89
2) ibid., p. 105
3) idid., p. 165
4) 小菅東洋『マシュウ・アーノルドの詩研究——信仰喪失の克服と詩の軌跡——』(研究社，1989) pp. 66-71 参照
5) 高橋康也「アーノルドにおける詩と真実」，『エクスタシーの系譜』(あぽろん社，1966) p. 174
6) J. D. Jump: *Matthew Arnold* (Longmans, 1965) p. 33
7) Park Honan: *Matthew Arnold: A Life* (McGraw-Hill, 1981) 参照
8) Kenneth Allot (ed): *The Poems of Matthew Arnold* (Longmans, 1965) p. 240
9) Paul F. Baum; *Ten Studies in the Poetry of Matthew Arnold* (Duke Univevsity Press, 2nd pr. 1961) p. 86の引用による。
10) Peter Milward が'Dover Beach' を冬の詩ととらえ，注釈者の川崎寿彦氏が1848年頃の作ととら

えているのは如何なものかと思う。*Seasonal Poems of Englaud* (Kenkyusha, 1980) pp. 85—87

11) Paul F. Baum: op. cit., p. 87
12) ibid., p. 87の引用による。
13) Kenneth Allot: op. cit., p. 240
14) ibid., p. 243
15) Paul F. Baum: op. cit., p. 91
16) Matthew Arnold: *Essays in Criticism* (Kenkyusha, 11th pr. 1961) pp. 3, 4
17) ibid., p. 4
18) ibid., p. 5
19) ibid., p. 13
20) ibid., p. 14
21) ibid., p. 267 土居光知の注による。
22) ibid., p. 1
23) ibid., *pp.* 15, 16
24) このPrefaceはArnoldの最初の'essay in criticism'と言われているが，私自身以前にWordsworthとArnoldのPrefaceを比較して，そこに批評家Arnoldの萌芽を見てあるので，今回は省略した。拙稿「Wordsworth と Arnold——二人の Preface をめぐって——」(「長野県短期大学紀要」第26号，1972) pp. 64-72
25) Matthew Arnold; *Essaysinc Criticism*, p. 14
26) Matthew Arnold: *The Study of Poetry* (成田成寿訳注，研究社，1973) pp. 20-25
27) Matthew Arnold: *Essays in Criticism*, p. 200
28) Matthew Arnold: *The Study of Poetry*, p. 21
29) ibid., p. 22
30) Matthew Arnold: *Essays in Criticism*, p. 5
31) 青木雄造「現下における批評の任務(抄)」の解題，『文学論集』(筑摩世界文学大系96，1965) p. 194
32) Matthew Arnold: *Essays in Criticism*, p. 33
33) ibid., p. 31
34) Matthew Arnold: *Culture and Anarchy*, p. 6
35) 前川祐一「アーノルドの教養主義」，『講座　英米文学史12』(大修館書店，1971) p. 70
36) Matthew Arnold: *Culture and Anarchy*, p. 45
37) ibid., p. 50
38) ibid., p. 60
39) ibid., p. 65
40) Matthew Arnold: *Essays in Criticism*, p. 67